

「新時代に対応した高等学校改革支援事業（普通科改革支援事業）」

普通科新学科通信

No.15

令和5年6月23日発行

発行 探究科設置準備委員会

今年度から1年生に先行実施している「学校設定科目KQI」の授業で、6月14日（水）に釧路市立博物館の学芸員による出前講座を実施しました。生徒は、5名の講師による講義を5校時・6校時に、2講座選択して受講しました。

講師の方の学芸員になるまでの略歴や現在の研究分野を選択した経緯、学芸員の仕事内容などの説明から講義が始まりました。それぞれの専門分野の研究に関するお話とともに、今後の探究活動への心構えなどを事例を提示しながら、話していただきました。各講座の講義概要と、生徒のレポートの一部を紹介します。

講座1 産業『君たちは「炭鉱」を知っているか？』

講師 学芸員（学芸主幹） 石川孝織 先生

「日本の近代化と発展を支えてきた石炭。かつては国内に800以上の炭鉱があったが、現在は釧路に1つのみとなった。石炭や炭鉱について、なぜ釧路の炭鉱だけが今あるのかについての理由」を説明していただきました。



生徒のレポートより

- ・石炭は炭素資源の缶詰、海や川で数億年かけて作られた。石炭は石油・天然ガスとは違い、鉱山で人の手を使って掘るため危険が大きい。現在日本では釧路のみである。（坑内掘りも唯一）釧路の炭鉱が残っているのは災害率0を目指し、労働組合も機能していて事故がほぼ起きていないから。
- ・石川先生が、釧路の炭鉱に興味を持ち、居住地を変える程の行動力や興味のあるものへの調査や取り組みの姿勢は、私自身が今後の生活、授業の中で参考にすべき尊敬するところだと思いました。そして、これをするためには、勉強が必要であるということを実体験も交えて教えてくれたので、今の私ができることを積み上げようと思いました。

講座2 アイヌ文化『”民族共生”を考える』

講師 学芸員（主査） 城石梨奈 先生

釧路地域のアイヌ民族の歴史や、伝統文化、現在の文化伝承について、さらに”民族共生”とはどういうことなのかについて、講義をしていただきました。また、研究活動を行っている先生の思いや姿勢に、生徒は多くの事を学んだ様子でした。

生徒のレポートより

- ・日本の歴史は1つだけではない。文字を使う文化、使わない文化に優劣はない。和人が来てからの歴史は浅いが、北海道の歴史は浅くない。民族共生とは、互いの違いを認める、多方向からの声を聞く、相手の立場から考えること。
- ・博物館の3本柱 ①資料の収集・保管 ②教育・普及 ③調査・研究
アイヌ語にも方言があるというのが印象的だった。アイヌの方言が、地域によってどのように違うか調べたいと思った。
- ・アイヌ民族、アイヌ文化は身近な存在である。しかしアイヌの人々を今でも差別する人がいる。民族共生のためには違いを認め、互いを理解することが必要である。

講座3 地域史『地域を知ること』

講師 学芸員（主任） 戸田恭司 先生

戸田先生が記録してきた釧路の写真を見せていただきながら、釧路というまち・地域についての講義でした。大人にとっては懐かしい釧路の風景、生徒にとっては知らなかった釧路を発見となったのではないのでしょうか。

生徒のレポートより

- ・釧路は地理的に近い東北の人々、鳥取県士族、北陸からの漁業者など、全国から人々が移住してできた町だと分かった。また釧路は米町から始まってだんだん南大通りの方に広がっていったと知った。
- ・学芸員の留意点として、必要な情報よりも多く集めることや、恣意的な判断を防ぐことの2つを挙げていた。これらはこれから探究活動を行っていくにあたって、参考にすべきことだと思った。そして、学芸員という仕事は毎日が探究活動であり、それを幅広い世代の人々にどのように紹介するかという難しさがあるというも学ぶことができた。

講座4 昆虫『昆虫の分類－「目」までの分類と同定－』

講師 学芸員（学芸専門員） 土屋慶丞 先生

博物館では収集した資料を相手にした「分類との闘い」とのこと、昆虫の分類や分類学について、標本を提示しながらの講義でした。中学校の教科書に出てくるヤマユガや他の標本を観察している生徒たちの目が、輝いていました。



生徒のレポートより

- ・「少年の日の思い出」に出てくるヤマユガの標本が、見られた事が印象に残りました。他の標本もいくつか見られて、今度博物館に行ったら他の昆虫の標本も見たいし、標本の作り方も気になったので、調べてみようと思います。
- ・昆虫は口の形や翅のたたみ方などを細かく調べていき「目」までの分類は完了している。「綱・目・科・属・種」の順により細かく分類されていき、中でも「属」や「種」は専門家の領域である。

講座5 魚類・両生類『希少生物の調査・研究と保護・保全』

講師 学芸員（主査） 野本和宏 先生

釧路湿原などの貴重な自然環境の中で暮らしてる、絶滅危惧種や天然記念物に関して、その調査の意義・手法、保護や保全のあり方などについて、事例をあげながら説明していただきました。また、湖陵から見える春採湖の生物や環境についても話題になりました。

生徒のレポートより

- ・キタサンショウウオといった生物が、釧路湿原という身近なところに生息していて、その生物の生息適地が、ソーラーパネルの設置により奪われている。そのために、調査や研究、保護・保全など地域に密着し、様々な連携をしながら活動をしている。
- ・GISを活用したキタサンショウウオの生息地の推測が、特に印象に残りました。最近、地理総合や講師の方などからGISを利用したデータを知り、自分でもGISを活用して絶滅危惧の生物たちの保護や環境の保全を、地域や釧路のために行っていきたいです。

生徒は、学芸員の皆さんの研究活動に励む姿勢に接し、今後授業で取り組む「探究的な活動」への取り組み方を学ぶことができた、有意義な時間となりました。